

幸若舞「敦盛」から「人間五十年」の試み —チェコでのワークショップを通して

Noh Workshop in Czech Republic: “Ningen Gojunen” from Kowaka-mai “Atsumori”

松井 貴子

MATSUI Takako

Abstract: “Ningen Gojunen” solo dance is famous because it is said that ODA Nobunaga performed this dance before the Battle of Okehazama, one of the greatest turning points of his life and at the end of his life in Hon’noji Temple. On March 13, 2008, I held a Noh workshop on “Ningen Gojunen” from Kowaka-mai “Atsumori” supervised by Haruko SUGISAWA, a female professional Noh performer of Kanze School, at Palacky University Olomouc in Czech Republic. Four Czech students tried to learn the Noh dance in four days and greatly succeeded. Two female students among them mastered wearing kimono by themselves at the same time.

Key words: Noh, Kowaka-mai, Atsumori, Ningen Gojunen, Reijiro TSUMURA, Haruko SUGISAWA, Czech Republic, Palacky University Olomouc, Japanese culture

能、幸若舞、敦盛、人間五十年、津村禮次郎、杉澤陽子、チェコ、パラツキー大学（オロモウツ）、日本文化

幸若舞「敦盛」の「人間五十年」で始まる一節は、織田信長が桶狭間の戦に出陣するときに舞ったと伝えられ、また、本能寺の変で自らの最期を覚悟して舞ったともいわれている。

現在、活字になっている詞章は、次の通りである。

人間五十年化天の内をくらぶれば、夢幻のごとくなり。一度生を受け滅せぬ者の有るべきか。
(註1)

この詞章に、観世流能楽師で重要無形文化財（能楽総合）保持者の津村禮次郎師（註2）が節付をなされたものに、同じく観世流能楽師の杉澤陽子師が型付を加えたもの（図1）を使い、杉澤師の監修（註3）のもと、チェコの大学生を対象としたワークショップ（註4）を行った。

チェコには、日本学を専攻できる大学が首都プラハのカレル大学の他に、南東部モラヴィア地方の古都オロモウツにパラツキー大学（1537年創立）がある。日本学科は1993年に哲学部に設置された。ここで日本学を専攻する学生で、日本語でのコミュニケーションには不自由のないレベルに達している3年生がワークショップに参加した。（註5）

能楽について全く未経験の外国人学生が、限られた時間のなかで、どこまで日本の伝統芸能を理解し身につけることができるか、日本文化発信の可能性を探る試みである。期間は4日間、使える時間は、その日の授業を終えたあとの2〜3時間であった。ワークショップを始めて4日目の夜に、パラツキー大学の在学学生、卒業生を中心とする日本クラブ主催の公開ワークショップとして、成果を発表した。参加した学生は4名で、男子学生2名はそれぞれ、剣道と合気道を稽古しており、女子学生2名のうち1名は着物を大学での研究対象としていた。女子学生2名には同時に着物の着付けについても教え、公開ワークショップの一環として、自分たちで着物を着て舞台上がった。武道の心得のある男子学生は、それぞれの武道の身体の使い方の癖が多少あるものの、腰の落ち着きは見事であった。着物を研究する女子学生は、一晩で帯結びまでの着付けを覚え、もう一人の女子学生に教えつつ、美しく着物を着て堂々と舞っていた。

ワークショップでは、まず、謡に関する基本的な事柄を説明し、西洋音楽とは異なる音の取り方、音程の変化（註6）については、杉澤師の謡をお手本とした。次に、能舞台及び仕舞について解説し、仕舞扇の扱い、構え、運びから始めて、仕舞の基本の型を実習した。（図4）「人間五十年」の舞の実技も、杉澤師の紋付袴での舞の映像をお手本とした。（図3）日本学科教員の渡邊隆行氏より、チェコ人は楽譜を読んだり、楽譜通りに厳密に演奏することは苦手だが、音楽的センスに優れていて、耳で聴いて、即興的に演奏することは得意であるという話をうかがい、このような民族的特質は入門的な稽古での能楽の習得に向いていると思われた。

公開ワークショップでは、主にビデオ映像を使いながら基本的な解説と実技を行った。公開ワークショップの参加者は、主として日本クラブの会員（図6）で、日本語の勉強を始めて間もない1年生から卒業生までと幅広いため、日本語を読めない参加者のために、日本語の音をチェコ語のアルファベットで表記した詞章（図2）を学生が自発的に作り、日本語の詞章型付と合わせて、ワークショップで参加者に配布するプリントとした。ワークショップの参加者は、初めて日本の扇を手にして、嬉しそうに、かつ、興味深そうに見つめ、そっと開けたり閉じたりしていた。（図5）そして、説明された通りに扇を丁寧に扱いつつ、謡と舞の習得に熱意を見せていた。（図7、8）

ワークショップで謡と舞を発表する学生は、最終的に3人となり、舞台に出ない学生は演出、舞台監督をつとめた。彼らは、ワークショップ当日の会場と時間の制約を考慮して、もとの型付を活かして、独自に三人連舞の「人間五十年」を考案した。（図9）伝統ある大学の講堂で舞われた三人舞は独舞よりも華やかさがあり、会場からは大きな拍手が起こった。（図10）そして、終演後には、観客と出演者たちが笑顔で記念撮影をしていた。

註

註1 「敦盛」荒木繁、池田廣司、山本吉左右訳注 東洋文庫426『幸若舞3』1983・10 平凡社 90、92頁

同書の注に、「化天」は「化楽天または楽変化天の略。仏語。六欲天の一。地上から数えて第五番目の天。この天は欲するものを化作して楽しませるとされ、長寿で、端正で楽しみが多い世界とされる。人間の八百歳を一日として、八千歳の長寿を保つという。」(119頁)とある。

註2 津村師は、今回のワークショップの教材とした「人間五十年」の他に、幸若舞「敦盛」として、原典の幸若舞「敦盛」から「人間五十年」の詞章に、その前後の部分を加えて抜粋し、節と型をつけた7分間の長い舞を創作して、次の文献(DVD付属)で公開している。

安田登 DVDブック『能に学ぶ深層筋トレーニング』2006・8 ベースボール・マガジン社

註3 杉澤師の型付では、シテ謡を繰り返す地謡が加えられている。また、ワークショップ後に改訂版として、「滅せぬもののあるべきか」を、最後にもう一度繰り返して謡い、ゆったりと舞いおさめる型付が、杉澤師によって作成された。

註4 このワークショップは、パラツキー大学(チェコ共和国オロモウツ市、宇都宮大学協定校)にて、宇都宮大学重点推進研究経費により、「国際学」としての「多文化公共圏研究」の一環として、日本文学(日本の近代俳句)についての講義を実施(2008年3月10日-14日)した折に、日本クラブ主催のイベント「日本の春」で幸若舞と着物に関する講座(2008年3月13日)を実施したものの一部である。

また、本稿は、国際融合文化学会第15回国内大会(2009年4月29日 於国立オリンピック記念青少年総合センター)での発表に基づいている。この発表では、資料として、ワークショップの様子を撮影した映像ファイル7編「千曲舞台」「練習」「扇」「構え謡」「指込開」「指込開2」「三人舞」を上映した。上田邦義先生、杉澤陽子先生より御指導、御助言を賜りましたことを御礼申し上げます。

註5 パラツキー大学の日本学科教員渡邊隆行氏によると、日本クラブのイベントでチェコの狂言が催されたことがあり、能はおそらく初めてであるという。

註6 謡の音の高さについては、弱吟、強吟、それぞれの基音を五線譜にあてはめたものが、次の文献で例示されている。能楽では、西洋音楽のような絶対的な音の高さが決まっていない。このためか、同じ其音に対応する音の高さが、それぞれの文献で異なっている。

横道萬里雄「能の謡」『岩波講座能・狂言IV 能の構造と技法』1987・10 岩波書店 289頁

三浦裕子 音楽選書79『能・狂言の音楽入門』1998・7 音楽之友社 39、42頁

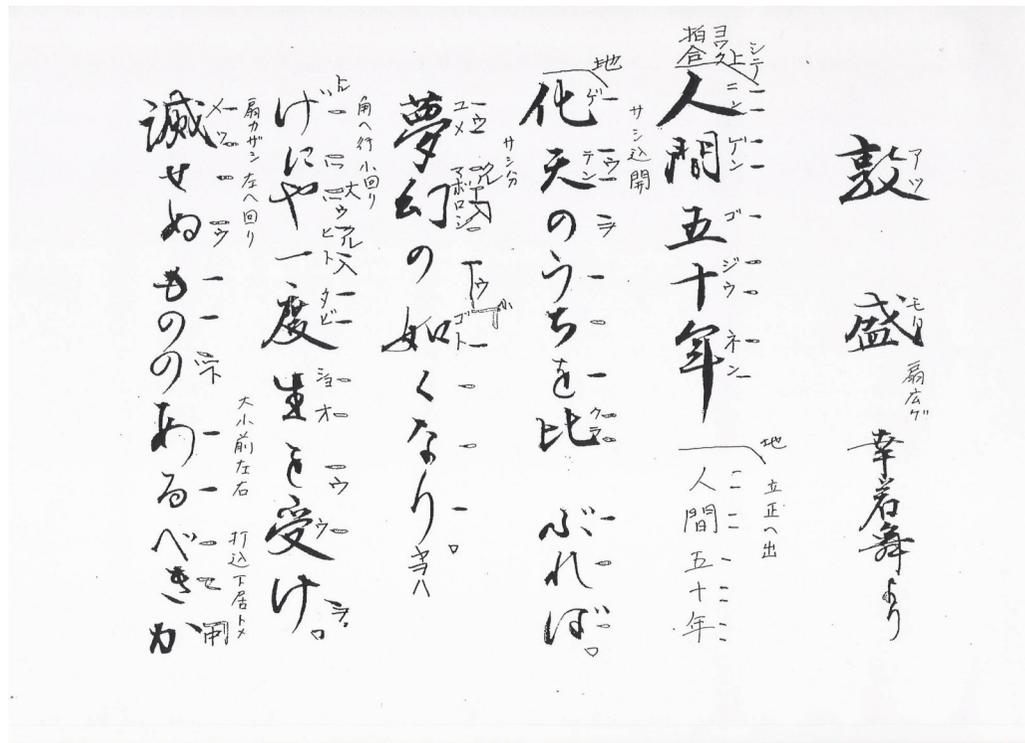


図1 津村禮次郎師による謡の節付と杉澤陽子師による舞の型付

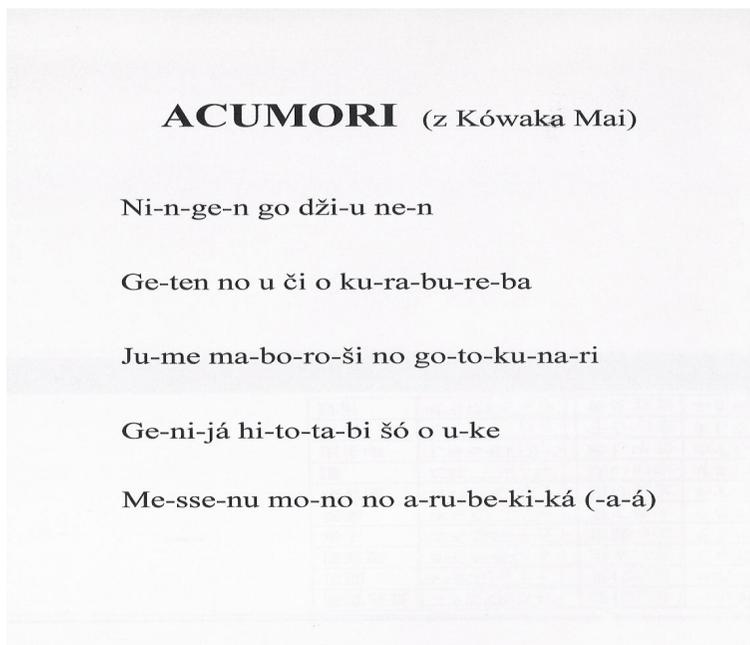


図2 チェコ語のアルファベットで音訳表記された詞章



図3 杉澤陽子師の「人間五十年」(東京・千曲舞台)



図4 公開ワークショップを行なう講堂の舞台での「人間五十年」の実技練習
この男子学生(ヤン・ストドニツキー)は、子供のときから剣道の稽古を積んだチェコのナショナルレベルの剣道選手で、2008年10月から一年間、宇都宮大学に留学。



図5 扇を手にして、嬉しそうにしている学生たち

中央にいる男子学生（オンドジェイ・ヴィエチョレワ）は、合気道の心得があり、自分の扇を持参している。ワークショップでは「三人舞」の振付、演出、舞台監督を務めた。



図6 公開ワークショップに参加した日本クラブのメンバーたち



図7 公開ワークショップで、仕舞の基本の型「指込 (サシコミ)」の実技 (オンドジェイ)



図8 公開ワークショップで、仕舞の基本の型「開 (ヒラキ)」の実技



図9 公開ワークショップの「三人舞」

左から、エリシュカ・ソバーコバー、ルツィエ・シテファーンコバー、ヤン
エリシュカは着物を研究しており、2008年10月から一年間、学習院女子大学に留学。
エリシュカとルツィエは自分で着物を着付け、ヤンは自分の剣道着と袴を着用している。



図10 舞い終えて、客席から大きな拍手